

「彼らは恐怖と共に生活している」

これはある映画の中で私が印象に残っている言葉である。

「子ども兵士」について知っているだろうか。日本に暮らしているとイメージしにくいと思う。「子ども兵」とは、満十八歳未満で戦争や紛争での実際の戦闘及び関連する活動に従事する子ども達のことを指す。現在、世界中には三十万人以上もの子ども兵士が存在すると言われている。国や地域によって原因は様々であるが、主に拉致や貧困による自主的入隊、さまざまな戸籍管理を利用した徴兵が挙げられる。

私は異文化理解という授業で、初めて「子ども兵士」という存在を知った。先生がみんなに考えてほしいと取り上げた「子ども兵士」の話は、あまりにも残酷で私は大きな衝撃を受けた。私よりもずっと幼い子ども達が誘拐され、兵士になり、人を殺すという事実。とても胸が痛い。なぜ子どもを兵士にする必要があるのか。子どもは体力も判断力も大人の兵士より劣っているはずだ。しかしその反面、洗脳しやすく脅しや暴力にも弱いいため、大人よりも死を恐れない勇敢な兵士となり得るからであるようだ。さらに近年、武器の軽量化が進み子どもでも十分扱えるようになったため、兵力不足に悩む軍やゲリラにとっては格好の兵士となるのである。

この異文化理解の授業の中で、ドキュメンタリー映画「Invisible Children」（邦題「見えない子どもたち」）を見た。この映画はアメリカ人の若者三人がウガンダの現地を訪れ、そこで出会った子ども兵の現実に衝撃を受け、帰国後制作したものである。植民地時代のウガンダでは、反植民地運動を行っていた南部出身者を領土国イギリスが冷遇し、政治実権のほとんどを北部出身者によって構成させるといふ権力の不均等をつくっていた。このことは南北の異なる民族間の権力争いを形成し、度重なる軍事クーデターや内紛を引き起こすこととなり、一九八〇年代からは南部中心の政府軍と北部中心の反政府軍「神の抵抗軍」(RA)との内戦状態となった。ジェセフ・ユニー率いるRAは宗教的な反政府武装勢力として北部ウガンダのアチョリ人を中心に構成されていたが、長引く戦況によりアチョリの支持を徐々に失っていった。軍事力や影響力を維持するため、RAは同族の村々で強奪行為を行い、襲った村の子ども達を戦闘員や性奴隷として拉致した。拉致されることを恐れた子ども達は、日が沈むとともに郊外の村から何キロも離れた北部の中心都市グルまで歩き、拉致から逃れるようになった。襲撃から逃れるために夜に集まってくる彼らは「Night Computers」（夜の移動者）と呼ばれるようになり、数千人を超える子ども達が、毎晩家族の元を離れ同じ境遇の子ども達と自らの身を守るようになった。

私はこの映画を見て、反政府軍が子ども達を拉致するという行為には、驚きと同時に大きな憤りを感じた。自分より年下の子ども達が親から引き離されて人を殺すことを強制され、人生を奪われるのを見るのは、とても辛く想像もつかなかった。

映像でも言っていたように、九・一一のことは誰でも知っているのにこの現状を知らないという人は多い。日本から遠いアフリカのこと、他人事になっているかもしれない。しかし、

それは実は私達に無関係ではなく、そこで起きている紛争の裏には先進国の存在が必ずある。この問題をすぐに解決することはできないかもしれない。でも、まずはその現状を知らなくては何も始まらないのである。

このような子ども達を救うために私は何をしなければいけないのか考えた。私が最初にできることはこの事実を伝えることである。

子ども兵士の現状を知った一人として、まだ知らない人に伝える義務がある。そして、このアフリカの現状をもっとメディアで報道し、より多くの人が知り、関心を持つべきだと考えた。世界中の人がこの問題について考えることが、少しでも問題解決に繋がるのではないかと思う。

私には看護師になり、患者さんを助けたいという夢がある。その夢が実現したときには、実際に現地に行き、苦しんでいる子ども達を救いたいと思う。まだ具体的に何をすればよいかは分からないけれども、将来何らかのかたちで、問題解決に努めたいと考えている。

今、世界は様々な問題を抱えている。その問題の一つとして、戦争や紛争が挙げられる。

「子ども兵士」は現代の戦争のかたちと言われ、戦争や紛争のせいで多くの子ども達が犠牲になっっているのである。戦争をして何の利益があるのだろうか。苦しみや悲しみ、深い傷しか残らないはずだ。何の罪もない子ども達を巻き込み、そして人生を奪う。世界中の三十万人以上もの子ども達が私達の助けを求めている。この問題をそのまま見過ごしていいのだろうか。子ども達の尊い命を犠牲にし続けていいのだろうか。今こそ、私達はこの問題と向き合い、アクションを起こすべきである。まずは、知ることから始めよう。そして、平和のメッセージを発信しよう。子ども達の明るい未来のために。